

「長篠設楽原の戦い跡」見学

養成講座の目玉になっている先進地研修の一環として、長篠設楽原戦いの跡見学が行われました。現地ガイドの案内で馬防柵、信玄塚を見て回り、他にはバスで戦となったエリアを回って説明を受けました。現地に行き馬防柵を前に辺りを眺め、当時の戦がどのようなものであったのか想像することは、とても意義あるものとなりました。

2km にわたった馬防柵

小さな連吾川を挟んで両軍がにらみ合ったという場所は、小高い山と山の間およそ幅300m程の耕地が広がっている。馬防柵は連吾川を目の前にした山裾に、新東名のあたり



りまで約 2km にわたって築かれたという。しかも、信長が岐阜から材料を運んできたというが信じられない。近くから調達するのが自然で、わざわざ遠くから運ぶ必要があるとは思えない。それとも岐阜から運んだという証があるのだろうか。

再現されている馬防柵は丸太がまっすぐに建てられているだけで、支えが1本もないのが不思議だ。これでは体当たりを重ねると倒れてしまうのではと思う。それに、信長が現地に到着したというのは天正3年(1575)5月18日で、21日早朝には大勢が決したというから、その間に2kmにわたる馬防柵を作ることができたのか.....。



歴史上の話では藤吉郎が一夜にして墨俣城を築いた話もあるなど、どこまでが事実でどこからは脚色されているのか、そんなこと

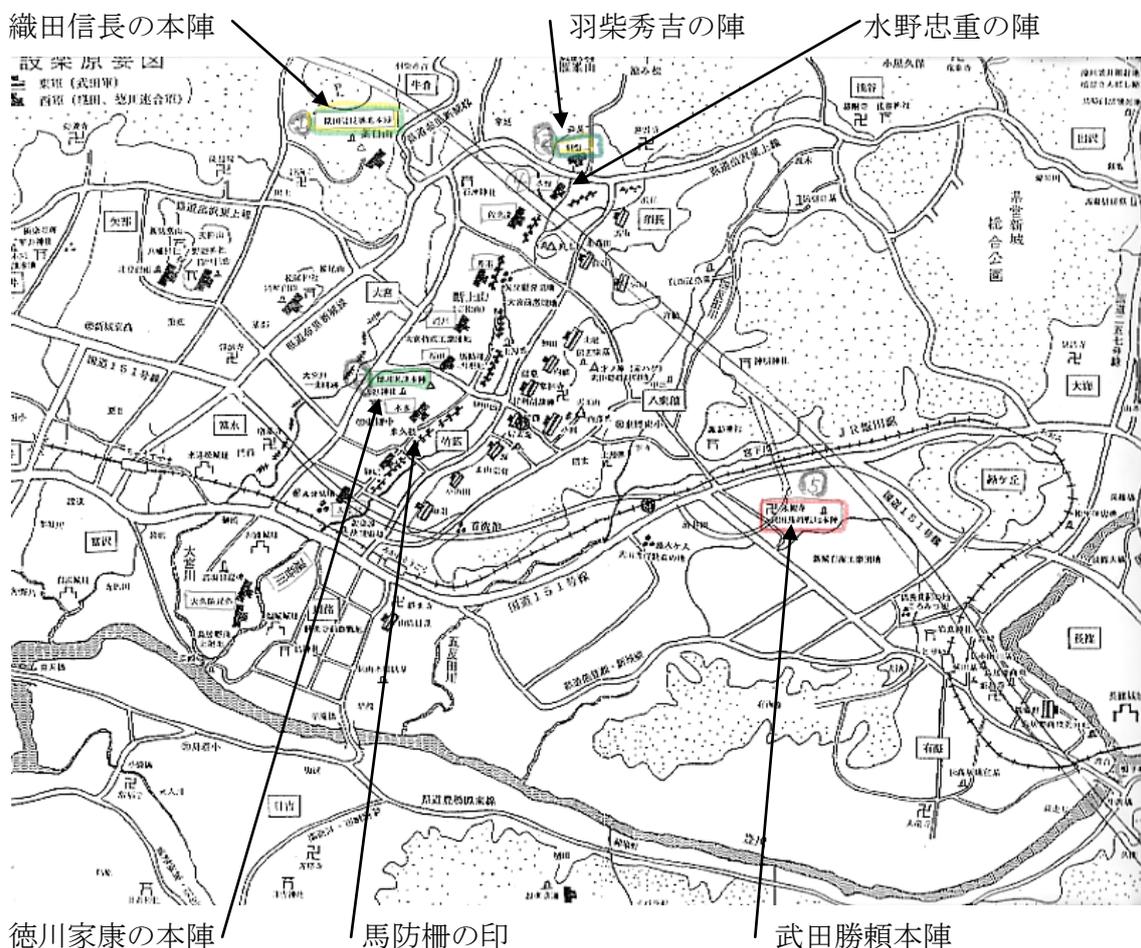
を考えるのも楽しいことに違いない。

馬防柵の説明板によると織田軍と徳川軍が造った馬防柵は、出入り口の造り方に違いがあるという。当時天下無敵とうたわれた武田の騎馬隊をこの馬防柵で防ぎ止め、その内側から鉄砲で狙い撃ちにするために造られた。連吾川沿いに三重の柵を構え、背後の

弾正山を越えた西側を流れる大宮川沿いには、さらに一重の柵を設けて万一に備えていた。徳川家康軍が構築した「鉄砲構え」は①乾いた堀②馬防柵③銃眼付きの身を隠す土塁の三段構えであった.....と設楽原をまもる会の説明板に記されていた。同じくもう一つの看板には「土屋正次 柵にとりつき大音声」と記されている、これは三段構えを乗り越えて柵の中までたどり着いた武田方はただ一人土屋正次で、彼はここで大きな声で名乗りを上げたというのだ。

しかし、数万人が入り乱れての戦いの最中にだれがどのように確認したのか、記録係がいてこの様子を確認したというのだろうか。確かに当時は自分が何者であるかわかるように旗などを身に着けるようにしていたというが.....。

天正3年5月21日(1575年6月29日)織田軍・徳川軍と武田軍の布陣



織田信長軍の主な武将

織田信忠 柴田勝家 丹羽長秀 明智光秀 羽柴秀吉 佐久間信盛 前田利家
 滝川一益

徳川家康軍の主な武将

松平信康 石川数正 本田忠勝 大久保忠世・忠佐・忠教兄弟 高木清秀 成瀬正一
平岩親吉 **水野忠重**

織田・徳川方 38.000 人 死者 60 未満 (ウイキペディアより)

武田方 18.000 人 死者 10.000~12.000 人

戦死した主な武将.....土屋正次 内藤昌豊 甘利利康 山県政景 真田信綱 原昌胤
真田昌輝

「信玄原の火おんどり」

いただいた「設楽原決戦場史跡探訪ツアーガイドマップ」は、戦死した武田方武将の墓が点在しているのが一目でわかる。裏側にはそれらの説明が載せられている。

この後、設楽原歴史資料館へ移動し隣にある「信玄塚」と、戦没者の供養の行事である「火おんどり」などについて説明を受けた。その中で一番印象的であったのは、設楽原の村人たちは武田の戦死者を丁重に葬った。それが信玄塚の大塚・小塚で、大塚は武田方の戦死者を、小塚は織田・徳川軍の戦死者をお祀りしていると伝わる。その後になって武田方の人たちがここ設楽原を訪れた際、このことを知りとても感激したとガイドは説明してくれた。確かに武田に縁のある人たちにしてみれば感激することだろう、でも考えてみると 10.000 人もの死人が田畑に転がっている、それも夏にそのまま放置できるものでもなく、当時としては村人たちが亡骸を処置しなければ生活に支障が生じたはずで、やむに已まれずという面もあったと思う。



武田方の戦死者を祀る大塚



戦の 400 年後に造られた慰霊塔

その夏、この塚から蜂が群れを成して発生し、信州街道を行き来する旅人が通行できないほどになった。村人たちは、これは武田軍の戦死者の亡霊と信じ、川路勝楽寺の和尚に頼み大施餓鬼を営みその霊を慰めた。そして、夜になると盛んに松明をともして供

養したところ、不思議にも蜂は出なくなったという。これが火おんどのりのはじめと
われている。江戸時代になるとアシとシダで作った大きな束を使うようになった、村人は
火おんどのりの火が体にかかると夏病みをしないといわれている。

現在も8月15日の盆の夜、信玄塚のある信玄原で行われ、県の民俗文化財に指定さ
れています。

郷土新城の偉人「いわせただなり岩瀬忠震」



設楽原歴史資料館の前に一人の武士の銅像が立っている。資料館の入り口に説明資料があり、それを見ると岩瀬忠震とある。その見出しには「日本開国の先進外交官・目付外国奉行」と記されている。

忠震は長篠設楽原の戦いで連合軍側に参戦、戦功を立てた川路城主設楽貞道の子孫という。幼少のころから学問に打ち込み、23歳で岩瀬忠正の長女と結婚し岩瀬家の養子となりました。才能を認められて順調に出世した彼は、37歳で目付に昇進して安政2年下田・戸田へ出向きロシアのプーチャーチンと応接。翌年、米国領事ハリス下田来航応接、さらに安政4年下田・長崎出張を命じられ、オランダ・ロシアとの和親追加条約調印。老中に横浜開港を提案。日米修好通商条約日本全権委員の一人に任命され、ハリスと談判、条約終了。安政5年外国奉行となるも、大老井伊直弼の怒りを受けて蟄居。文久元年44歳で病死した。

長篠の戦いに至る経緯

(ここからはウイキペディアより抜粋)

甲斐の国・信濃の国を領する武田氏は永禄年間に駿河の今川氏の領国を併合し、続けて遠江の国・三河の国方面へも侵攻していた。その間、美濃の国を掌握した尾張の織田信長は足利義昭を擁して上洛しており、当初は武田氏と友好関係を築いていた。しかし、將軍義昭との関係が険悪化すると、反信長勢力を糾合した義昭に応じた武田信玄が、信長の同盟国である家康の領国である三河へ侵攻した。

しかし、信玄の急死により武田勢は本国へ撤退。一方、信長は朝倉・浅井ら反信長勢力を滅ぼして、將軍義昭を京から追放。自身が「天下人」としての地位を引き継ぎ台頭した。

武田氏の撤退に伴い、家康も武田方に対して反抗を開始し三河・遠江の失地回復に努

めた。天正元年(1573)8月には徳川方から武田方に転じていた奥平貞昌が、再び徳川方についた。すると家康は武田方から奪還したばかりの長篠城に配置した、つまり対武田の前線に配置した。

武田氏の後継となった勝頼は、遠江・三河を再掌握するべく反撃を開始する。奥平氏の離反から2年後の天正3年(1575)4月に大軍を率いて三河へ侵攻した。これにより、長篠・設楽原における武田軍と織田・徳川連合軍の衝突に至る。

「信長公記」などによる合戦の経緯

長篠城の攻防戦

1万数千の武田の大軍に対し、長篠城の守備隊は500人であったが、200丁の鉄砲や大鉄砲を有し、かつ周囲を谷川に囲まれた地形のおかげで武田軍の猛攻に何とか持ちこたえていた。しかし、兵糧蔵の焼失により食料を失い、数日以内には落城必至の状況に追い詰められていた。そこで6.5km離れた岡崎城の家康に援軍を頼むため、鳥居強右衛門を密使として送ることに成功。しかし、鳥居強右衛門は大任を果たして城に戻ろうとしたが敵に捕らわれる。

「援軍は来ない、あきらめて城を明け渡すように」と言えば命は助けると取引を持ち掛けられ、鳥居強右衛門はこれを承諾。しかし、その場になると「二三日で数万の援軍が来る、それまで持ちこたえよ」と叫んだ。鳥居強右衛門はその場で殺されるが城兵の士気は大いに高まり、長篠で織田・徳川軍が武田軍を撃破するまで城を守り通すことができた。

信長軍の到着

信長軍30,000と家康軍8,000は5月18日に長篠城手前の設楽原に着陣。設楽原は小川や沢に沿って丘陵地が南北にいくつも連なる場所であった。信長は30,000の軍勢を敵から見えないように、途切れ途切れに配置し小さな連吾川を掘りに見立てて防御陣の構築に努めた。それは三重の土塁に馬防柵を設けるという当時としては異例の野戦築城だった。これは無防備に近い鉄砲隊を主力として柵・土塁で守り、武田の騎馬隊を迎え撃つ戦術を採ったもの。

武田方は軍議を開き、信玄時代からの重臣である山県昌景、馬場信春、内藤昌秀らは信長自らの出陣を知って撤退を進言したといわれる。が、勝頼は決戦を決定する。勝頼は長篠城へ武将7人を向かわせ、自分は15,000ほどの軍勢を織田軍と20町(約2018m)ほどの距離に、13か所ほどに分けて西向きに布陣したという。

武田のこの動きを見て信長は「武田軍が近くに布陣しているのは天の与えた機会である、ことごとく討ち果たすべき」と、鉄砲を主力とする守戦を念頭に置き、武田の騎馬隊を誘い込む狙いであった。

鳶ヶ巣山の攻防戦

5月20日夜、信長は家康の重臣酒井忠次を呼び、徳川軍の中から鉄砲隊2,000ほどとこれに自身の鉄砲隊500など4,000ほどの別動隊を組織し、奇襲を命じた。別動隊は正面の武田軍を迂回して豊川を渡り南側から尾根伝いに進み、翌日の夜明けに長篠城包囲の要であった鳶ヶ巣山砦を奇襲した。奇襲は成功し本砦と4つの支砦もすべて落とされた。これによって、織田・徳川軍の長篠城救援の第一目的を果たした。

さらに、籠城していた奥平郡を加えた酒井別動隊は追撃の手を緩めず、有海村駐留中の武田軍まで掃討したことで設楽原の武田本体の退路を脅かすことにも成功した。

なお、この作戦は20日夜の軍議で酒井忠次による提案であったが、信長に一蹴された。ところが、軍議を終えるとすぐに信長は酒井を密かに呼びつけ、作戦の決行を命じた。武田軍の諜報を案じてあえて採用しなかったのが理由であるという逸話が「常山紀談」に載せられている。

設楽原決戦

5月21日早朝、設楽原では武田軍が攻撃を開始。戦いは昼過ぎまで続いたが、武田軍は10,000以上の犠牲を出し、織田・徳川軍の勝利で合戦は終結した。

織田・徳川軍には主だった武将の戦死者が見られないのに対し、信長公記に記された武田軍の戦死者は譜代家老の内藤、山形、馬場をはじめとして重臣や指揮官二もおよび、被害は甚大であった。勝頼は数百の旗本に守られて一時は菅沼定忠に助けられ武節城にこもったが、信濃の高遠城に後退した。

長篠合戦の政治的影響

長篠における勝利、越前一向一揆平定による石山本願寺との和睦で、反信長勢力を屈服させることに成功した信長は、「天下人」として台頭した。また、徳川家康は三河を完全に掌握し、遠江の重要拠点である諏訪原城、二俣城を攻略して高天神城への締め付けを強化した。

武田勝頼は関東諸侯との同盟により北条氏を牽制し、武田家に人質としていた小田信房を返還して信長との和睦を試みるが、天正10年3月に織田・徳川連合軍による武田領国への本格的侵攻が行われ、武田氏は滅亡した。

長篠城主奥平貞昌は家康の長女亀姫をもらい受け正室とした。そのうえ名刀も賜るという名誉を受けた。さらに、その重臣も含めて知行などを子々孫々に至るまで保証するというお墨付きを与えられ、貞昌を祖とする奥平松平家は明治まで栄えた。また、処刑された鳥居強右衛門は後世に忠臣として名を残し、その子孫は奥平松平家家中で厚遇された。